

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：82621

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13019

研究課題名（和文）1990年代から2000年代のロンドンにおける具象絵画に関する研究

研究課題名（英文）Research on figurative painting in London in the 1990s and 2000s.

研究代表者

榎田 倫広（Masuda, Tomohiro）

独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・企画課・主任研究員

研究者番号：70600881

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：1990年代の「新しい具象」の画家の代表的な作家のひとりであるピーター・ドイグの絵画の特徴を明らかにするため、先行研究や既存言説の翻訳、そしてそれを踏まえた論文を執筆し、書籍（展覧会カタログ）にまとめた。90年代の先行例を考えるため、具象と抽象絵画のどちらも描くゲルハルト・リヒターや、90年代から2000年代にかけて登場した新しい絵画のあり方の先駆者として当時再評価されつつあったドイツ人作家マルティン・キッペンベルガーについて、それぞれ書籍と論文にまとめた。また、ドイグ以降のイギリスにおける非白人作家の動向を考察する上で、リネット・イヤドム=ボアキエに着目し、論文にまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1990年代の絵画表現のおおまかな特徴として、異種混交性が重要な要素のひとつだと考えられる。それは作者の人種、背景の多様化、それに伴う主題の多様化、さらには絵画を他のメディアと組み合わせるなどして、絵画のみでは成立させないような作品のあり方によって規定される。90年代の動向はまだ歴史化の端緒にすぎないばかりで、しばしば「なんでもあり」の状況を招いた時代とも言われることもあるが、こうした近過去の言説の整理や、作品分析をつうじて、現代における絵画の批評的意義に関する一視座を提示することができたと考える。今後も研究を続けることで、美術史およびわたしたちの美術への考え方を深めることに貢献したいと考える。

研究成果の概要（英文）：In order to outline the paintings of Peter Doig, one of the leading painters of the 'new figurative' in the 1990s, I compiled in a book (exhibition catalogue), including the translation of the existing the essay and discourses and a thesis based on them. In order to consider the precedents of the 1990s, I summarized in a book about Gerhard Richter, who painted both figurative and abstract paintings. And I wrote an essay on the German artist Martin Kippenberger, who was being re-evaluated at the time as a pioneer of a new way of painting that emerged between the 1990s and 2000s. In addition, in considering the trend of non-white artists in the UK after Doig, I focused on Lynette Yiadom-Boakye and summarised her work in a paper.

研究分野：美術史

キーワード：美術史 現代美術 美術批評

1. 研究開始当初の背景

ここ 10 年間のあいだ、展覧会をつうじて近過去を検証する機会がたびたび見られていた。特に 2010 年代半ばから終盤にかけて、1970 年代から 80 年代を回顧する機会が目立った。たとえば 2017 年、ロンドンのバービカン・センターで開催されたアメリカ人作家ジャン＝ミシェル・バスキアの回顧展では、個展という体裁を取りながら、彼が関わった 80 年代ニューヨークの若者文化の動きが広範に検証された。同年、テート・ブリテンで開催されたレイチェル・ホワイトリードの個展も、現役の作家による展覧会にもかかわらず、どちらかと言えば 80 年代から 90 年代にかけての彼女の初期の作品に比重が置かれていた。日本国内に目を向ければ「BY 80s FOR 20s」展（岐阜県美術館、2017 年）、「起点としての 80 年代」（金沢 21 世紀美術館、2018 年）、「ニュー・ウェイブ現代美術の 80 年代」展（国立国際美術館、2018 年）など、立て続けに 1980 年代の美術動向を検証する展覧会が企画されていた。こうした動向に鑑み、1990 年代について考察を加えようと考えた。そのための研究対象として、イギリスの具象絵画に焦点を当てた。

いわゆる「新しい具象（ニュー・フィギュラティヴ）」と呼ばれた 1990 年代における具象絵画の興隆は、世界的な動向であった。イギリスの作家ピーター・ドイグはイギリスのみならず世界的に代表的な作家のひとりで、日本の後続世代の画家たちにも多くの影響を与えている。なお、日本では奈良美智、杉戸洋らの作品がしばしばこの「新しい具象」の動向に括られる。彼らが注目を浴びるようになった素地は、1980 年代に新表現主義と呼ばれる具象的な絵画を生み出す作家たちが登場したと深く結びついている。しかしながら、新表現主義の作家たちの作品が 60 年代から続いたコンセプチュアル・アートの反動として、批評的な意味を担っていたとみなされていたのに対して、90 年代の具象絵画は 80 年代とは様相が異なる。殊にイギリスにおいては、ダミアン・ハースト、トレイシー・エミンなどに代表されるように、ヤング・ブリティッシュ・アーティスト（YBAs）が 80 年代末から 90 年代にかけて登場していた。彼らは、コンセプチュアル・アートを引き継ぎながら、扇情的とも言える大掛かりなインスタレーション作品を生み出し、美術界のみならず、一般大衆、さらには美術市場の関心を惹きつけていた。この状況のさなか、イギリス国内ではピーター・ドイグ、クリス・オフィリら具象的な絵画を描く作家たちもデビューする。彼らの作品はそれまでのモダニズム批評が抑圧してきた物語性を絵画に取り入れ、映画や文学、大衆文化といった別領域からイメージを引用した。しかも他ジャンルのモチーフを引用すること自体が批評的な意味を持っていた新表現主義の作品に比べれば、彼らは当たり前のようにさまざまな文脈に由来するイメージを作品のモチーフとして採用する。そしてたとえばトリニダード・トバゴとカナダで育ったスコットランド生まれのドイグや、マンチェスター生まれのナイジェリア移民の 2 世であるオフィリの作品のなかには、欧米中心主義の観点からは捨象されてきた周縁の近代美術や植民地主義の歴史、いまでも続く人種差別の問題などが取り込まれ、いわば異種混交的な世界観が反映されている。なお、ドイグは YBAs に対して対抗意識を持っていたと後年語っており、一方、オフィリは当初こそ YBAs の作家として紹介されることもあったが、次第にその名のもとに自身が括られることを拒絶するようになる。YBAs の作家たちの作品と新しい具象の画家たちの仕事は、一見すると全く接点の

ないもののように見えるが、双方が意識をしていたという点において、実は密接に関わり合う。ゆえに絵画に焦点を当てることは、他のジャンルを除外することを意味せず、むしろ絵画をつうじて現代美術全般のことを考える視座を与えてくれるものと考えていた。

また、90年代に登場してきたイギリスの作家たちの作品に表れた異種混交的な様相や、それらが評価された背景には、80年代からイギリス社会に徐々に浸透していった多文化主義を擁護する施策と風潮、とりわけブレア政権誕生の97年以降においては、それを包括する社会・文化現象である「クール・ブリタニア」と密接に結びついていると考えられる。80年代から90年代にサッチャーからブレア政権に至る社会ないし文化の変革については豊富な先行研究があった。本研究を進めているさなかにも、萩原弘子による『展覧会の政治学と「ブラック・アート」言説—1980年代英国「ブラック・アート」運動の研究』（すずさわ書店、2022年）などの1980年代から2000年代にかけてのイギリスの文化動向を考察した重要書籍が刊行された。石松紀子は『イギリスにみる美術の現在—抵抗から開かれたモダニズムへ—』において、80年代から90年代にかけて、非欧米系の作家の作品の扱いが「エスニック・アート」から「文化的多様性」へと移行することで、徐々に「イギリス美術」の領域に包括されていった背景を論じている。この「文化的多様性」こそが、90年代のクール・ブリタニアではイギリス美術のアイデンティティとして規定される。しかしながらこれまでの研究は、このような社会・文化的変動の状況を指摘し、彼らのモチーフにそれらが表象されていることや、その政治的な重要性を指摘するに留まり、作品に採用された形式的特徴にもとづく美術史的ないし美的な批評性については、十分に考察されているとは言い難い。ゆえに非欧米系の作家の躍進や、彼らが生み出す異種混交的な世界観を持つ作品の形式や美学的な特徴を社会の変容と合わせて捉える視座が必要に思われた。

2. 研究の目的

本研究は、1990年代のイギリスにおける具象絵画の作家たちを対象とし、彼らの美学的、形式的特徴を明らかにし、またいかなる同時代、前時代の動向に触発されたものか、また当時の政治・社会的な動きと如何に密接に結びついているかを検証する。そのなかでなぜイギリス、しかも、とりわけ絵画を主な研究対象に据えるのか。ひとつにはイギリスの文化研究、とりわけポストコロニアル批評の豊富な先行研究が研究を進める上での導きになりうると考えたからだ。1990年代とは、芸術作品の様態のみならず、それを生み出す作者が多様化していく時代である。もともと、多様な背景をもつ作家たちは90年代以前から存在していた。したがって多様な人種の背景をもつ作家たちが、それぞれの文化的背景を用いながら作品を生み出すことが評価されるようになり始めた時代と捉えるのがより正確だろう。特に1990年代以降のイギリスの具象絵画のシーンには、クリス・オフィリを筆頭にハーヴィン・アンダーソン、リサ・ブライス、マイケル・アーミテージ、近年ではリネット・イヤドム＝ボアキエ、クザナイ＝ヴァイオレット・ワミの作家など、イギリスの旧植民地と繋がりをもつ作家たちの躍進が顕著である。これに並行して、近年、20世紀の半ば以降イギリスで活躍してきた、非白人の作家たちの再評価も進んできた。たとえば、フランク・ボウリング、ルベイナ・ヒミッド、デンジル・フォレスターなどである。

1990年代は、YBAsが象徴するように、イギリスが世界のコンテンポラリー・シーンを席卷した時代である。80年代末から90年代のロンドンでは、ダミアン・ハーストなどに代表される若い作家たちが次々とデビューした。彼らの作風はさまざまだが、敢えて簡単に整

理すれば、彼らはコンセプチュアル・アートを踏まえ、大型のインスタレーションなどの形式を採用した。また彼らのコインの裏側のように、ピーター・ドイグのような具象的なイメージを描く画家もデビューした。彼らの作品の特徴は、現在のコンテンポラリー・アートの一原型をなし、日本の現代美術にも深い影響を与えている。一国の、ないし一地域の美術のシーンがすぐさま世界中に伝播する現在において、ロンドンのシーンを検証することは、同地の特殊事例のみを研究することを意味しない。むしろ、一地域の現象を深く考察することを通じて、同時代の東京や他の都市でも起きた現象を考察する上でも有用な視座が得られると考える。事実、ロンドンで具象絵画が興隆したのと同じ頃、東京でも具象的な絵画が再評価されていた。つまり 90 年代のイギリスの美術シーンは、日本の美術シーンを考察するための比較参照項ともなりうる。

ところで、広告代理店の創業者であるチャールズ・サーチが YBAs の作品を購入し、展示場所を提供し、そして、なにより YBAs という名を与えることによって、作家たちを支援したように、美術実践とマーケットとの関係が深く結びついたのも、この時代の特徴でもある。そしてこれは現在も続く傾向でもある。これまでの日本における先行研究では、YBAs の台頭は美術の新しい形式を生み出したという文脈よりも、しばしば美術が市場や大衆社会と結託した所産であるという見方がなされることがある。そのなかにあつて旧来の美術の形式である絵画は、さらに市場向けの美術作品とみなされることも少なくない。たとえば美術の批評的な側面が強く反映される傾向にあるビエンナーレなどの美術の祭典ではインスタレーションや映像作品が多く、翻って売買が主目的であるアートフェアにおいては、相対的に絵画が多く見られるといったように。「美術批評の死」という時代のなかで、コンテンポラリー・アートの領域では、発表する場所に応じて作品のすみわけがなされ、絵画は他のジャンル以上により市場に近いものとみなされている。ドイグもまた、その作品が市場で高額で取引されていることから、市場によって評価された作家と揶揄されることもある。もちろんこうした見方は印象論による俗説に過ぎない。しかしながら、90 年代以降の絵画に対して、有効な批評言語が生み出せていないように見えるのも確かである。しかし果たして本当にそうだろうか。こうした問題意識から、90 年代の絵画にまつわる言説を整理しながら、90 年代の具象絵画の批評的意義を改めて考えてみたい。すなわち担い手が多様化し、主題、スタイルが多様化するなかにおいて、そのこと自体を社会との関係から考察する先行研究を踏まえ、個々の実践における美的、様式的特徴が社会状況と関わりながらいかに彫琢されたかを検討する。また、先に YBAs の躍進にチャールズ・サーチの存在があつたと指摘したが、実は具象絵画の興隆にもサーチは関わっている。所有する YBAs の作品の一部が火事で消失した翌年である 2005 年に、サーチ・ギャラリーは「絵画の勝利」と題した展覧会を 3 期に分けて開催した。この展覧会は、リュック・タイマンズ、マルレーネ・デュマスなど欧州で活躍する既に名声を確立した作家のほかに、イギリスや欧州で活躍する若手の作家などを取り上げた。これをきっかけに YBAs の次のムーブメントは絵画か、という見出しが当時のメディアを駆け巡ったように、この展覧会がコンテンポラリー・アートのシーンで少なからぬ反響を与えた。こうした状況を念頭におきながら、当時の絵画を取り巻く言説を包括的に分析する。

3. 研究の方法

本研究は当初、3つの視座を用いて、90年代の具象絵画に対する美術批評を検討する予定だった。1つは美術批評の言説研究という従来の手法。これによって、当時、インスタレーションなどの形式が主流にみなされるような状況にあつて、具象絵画が美学的な観点において、どのように捉えられていたかを明らかにする。2つ目は、社会動向との関係性。文化的多様性という社会風潮の影響が、どのようなかたちで美術批評に批評的骨格を与えたかを、言説分析を通じて跡づける。通常、マクロな文化研究において採用されるアプローチだが、これを個別の作家ないし作品の批評のなかに読み込む。3つ目は、広い意味での「マーケット」とのかかわりである。これもまた従来は、美術研究とは完全に切り離されて研究されることが多い。本研究では主にチャールズ・サーチの活動を焦点に当て、彼のコレクション形成や展覧会活動などによって、当該作品あるいは、それを生み出した作家の評価がどのように変わったかを調査する。これらを組み合わせることで、90年代の具象絵画に関する美術批評の言説を総合的に検討する見通しだった。

このうち前者ふたつの手法については、個々の作家、展覧会研究において、遂行することができた。3つ目の方法については、方法論の検討、および研究対象の資料収集について着手することはできたが、具体的な論文として結実させることは、現時点では叶わなかった。今回の研究を糧に今後、論文としてかたちにしていきたいと考えている。

4. 研究成果

研究成果としては、以下のとおりである。

書籍 『ピーター・ドイグ』読売新聞社／東京国立近代美術館、2020年

書籍 榎田倫広、鈴木俊晴監修『ゲルハルト・リヒター』青幻社、2022年

論文 「フランシス・ベーコン（1909～1992）研究における資料の取り扱いについて」『東京国立近代美術館研究紀要』第26号、2022年、4-19頁。

論文 「ロンドンにおける1990年代から2000年代にかけての具象絵画の展覧会史「トライアンフ・オブ・ペインティング」展について」『東京国立近代美術館研究紀要』第26号、2022年、20-29頁。

論文 「リネッテ・イアドム＝ボアキエの黒い絵画」『東京国立近代美術館研究紀要』第27号、2023年、50-58頁。

論文 「初期作品における「様式の折衷」を可能にする条件とは？」『美術手帖』vol. 75, no. 1099、2023年、32-35頁。

論文 「仮設的（または暫定的）な絵画（Provisional Painting）と、マイクロポップ、そしてアノーマリー——絵画のモダン、ポストモダンのあとで」『コメット通信』no. 39、2023年

論文 「三瀬夏之介作品の形式について——絵画のモダン、ポストモダンのあとで」『コメット通信』no. 42、2024年

論文 「落合多武の近年の絵画作品について——絵画のモダン、ポストモダンのあとで」『コメット通信』no. 45、2024年

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 榎田倫広	4. 巻 vol. 75 no. 1099
2. 論文標題 初期作品における「様式の折衷」を可能にする条件とは？	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 美術手帖	6. 最初と最後の頁 32-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 榎田倫広	4. 巻 no. 39
2. 論文標題 仮設的（または暫定的）な絵画（Provisional Painting）と、マイクロポップ、そしてアノーマリー 絵画のモダン、ポストモダンのあとで1	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 コメント通信	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 榎田倫広	4. 巻 no. 42
2. 論文標題 三瀬夏之介作品の形式について 絵画のモダン、ポストモダンのあとで2	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 コメント通信	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 榎田倫広	4. 巻 no. 45
2. 論文標題 落合多武の近年の絵画作品について 絵画のモダン、ポストモダンのあとで3	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 コメント通信	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 榎田倫広	4. 巻 第27号
2. 論文標題 リネット・イアドム=ボアキエの黒い絵画	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京国立近代美術館 研究紀要	6. 最初と最後の頁 50 58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 榎田倫広	4. 巻 26号
2. 論文標題 フランシス・ペーコン (1909~1992) 研究における資料の取り扱いについて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京国立近代美術館 研究紀要	6. 最初と最後の頁 4-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 榎田倫広	4. 巻 26号
2. 論文標題 ロンドンにおける1990年代から2000年代にかけての具象絵画の展覧会史 「トライアンフ・オブ・ペインティング」展について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京国立近代美術館 研究紀要	6. 最初と最後の頁 20-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 榎田倫広、鈴木俊晴監修	4. 発行年 2022年
2. 出版社 青幻社	5. 総ページ数 352
3. 書名 ゲルハルト・リヒター	

1. 著者名 東京国立近代美術館他編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 読売新聞社 / 東京国立近代美術館	5. 総ページ数 228
3. 書名 ピーター・ドイグ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------